◆研究ノート◆　　『むくげ通信』169 号（1998 年７月 26 日）

Ｌ．Ｌ．ヤングと在日朝鮮人キリスト者

飛田　雄一

●はじめに

前々号の『むくげ通信』167 号で神戸市立外国人墓地に眠るＬ．Ｌ．ヤングのことを少し紹介した。また、同 135 号（92 年 11 月）で信長正義さんが「随想／神戸市立外国人墓地」でも紹介している。この墓地には朝鮮のキリスト教と関係の深いもう一人の宣教師 Ｗ．Ｂ．スクラントンの墓がある（墓地内でのヤングの墓はＢ１区１８番、スクラントンはＢ１区１０番）。神戸時代のことが何もわかっていないスクラントンのことが気になるが、それは今後の課題として今回はヤングのことについて書いてみようと思う。

●神戸市立外国人墓地

神戸市立外国人墓地は神戸の背山・六甲山にある。神戸三宮から北東へ約３キロ、タクシーでは約２０分、登山口（三宮から市バス⑦、諏訪山公園）からは徒歩１時間半という所だ。面積は 14ha ある。

神戸の外国人墓地の歴史は 1967 年にさかのぼるという。最初の埋葬は生田川尻の小野浜（現在の神戸市中央区浜辺通）でおこなわれた。その小野浜墓地も 1898 年にはいっぱいなり、青谷の春日野（現在の神

戸市中央区籠池通４丁目）に外国人墓地が設けられた。1930 年に現在の場所への移転が提案されたが、阪神大水害（1938.7）や第２次世界大戦で延期された。戦後、1952 年 5～8 月に小野浜墓地の 666 基、1960 年 10 月から春日野墓地の 1406 基が移転され、それが完了した 1961 年 11 月に現在の外国人墓地が開園したのである。現在、外国人と結婚した日本人の妻もふくめて約 2500 人が埋葬されている。宗教は 20 余種、国は 56 ヵ国、お菓子で有名なモロゾフ、フロインドリーブの墓もある。

六甲山は広義では、東は宝塚から西は神戸市塩屋までの約 30 キロの山脈全体をさす。その西から東までを縦走する「六甲山全山縦走の会」が毎年 11 月に開かれているがその距離は実に 56 キロ、上る高さは

累計で 2000 メートル、時間は 14～16 時間というものだ。私も一回行ったがスポーツというより我慢大会という感じだ。充実感はすごいが、まあ一度成功したらそれでいいのではないかと思う。六甲山は本当にとてもいい山なので、もっとゆっくりと登ってほしいと思う。

最高峰の六甲山は標高 931 メートル。山脈全体の東側、ＪＲでいうと住吉駅の北あたりにある。

その標高が 95 年の阪神淡路大震災で 17 センチ？高くなった。もともと六甲山は長い間に大阪湾が沈み、逆に六甲山が高くなってできたのである。千年に一度程度の大きな地震があったというのである。地質学者が震災後にそう説明し、「なんだ早く言っといてくれよ」と思ったが、震災の年の秋、国土地理院が六甲山の標高が高くなったことを正式発表してそのことは裏づけられたのである。(新聞記事を失ったので 17 センチは自信がない)

墓地の入り口

外国人墓地のある再度山(ふたたびさん)公園は、神戸市内の小学生は遠足で年に２、３度行くところだ。私もよく行って、当時、２～３００人の生徒が２組に分かれてダイナミックに「クチクスイライ（駆逐艦‥‥）」の戦争ゴッコをやったものだ。

そのころ、外国人墓地は誰でも入ることができた。ところが最近は、原則的に入ることができず、「お墓参り」のみが許されている。

●朝鮮での宣教

ヤング（Lither Lisger Young）は、榮在馨という朝鮮名ももっていた。墓碑には英語名とともに朝鮮名が刻まれている。

1875 年 2 月 21 日カナダに生まれのヤングは、大学で神学を学んだのち 1906 年カナダ長老教会宣教師として朝鮮に渡った。朝鮮では、咸興、城津、元山等で宣教活動を行った。オートバイに乗って冒険のように勢力的に各地を回ったといわれている。

1925 年になって本国カナダでキリスト教界の再編が行われ、ヤングの属していた長老教会が、メソジスト（監理）教会等と連合して「カナダ連合教会」を結成した。その結果、ヤングを朝鮮に派遣していた長老教会の海外宣教事業も連合教会の事業に組み込まれることになった。

ヤングのキリスト教信仰は保守主義的な傾向が強かったため、新たなカナダ連合教会の立場を受け入れることができずに教派と離れて独自の伝道活動を行うことになったのである。

当時、朝鮮では海外のキリスト教教派がそれぞれに朝鮮半島の地域を分担して宣教活動を展開していた。カナダの教会の再編はその地域割りにも影響を及ぼし、ヤングの活動していた東北地域もカナダ長老

教会の宣教地域から連合教会の宣教地域とされたためヤングが活動できなくなったようだ。

そこでヤングは、朝鮮での宣教活動をあきらめて在日朝鮮人への宣教活動を行う決心を固めるようになったのである。

●神戸を拠点に活動を開始

ヤングは 21 年間にわたる朝鮮での宣教活動を終えて、1927 年 10 月 1 日、横浜にやってきた。そして日本では神戸を根拠地にして、文字どおり日本全国津々浦々、北はサハリンから南は九州まで在日朝鮮人のために宣教活動を展開するのである。住居は長峰山（現神戸市灘区、現在も欧米人が比較的多く住んでおり阪神のバースも住んでいた）にかまえた。

当時、アメリカン・バプテスト、教会宣教教会（ＣＭＳ）、米国長老教会（ＰＣＵＳ、余談だが神戸学生青年センターもこのグループ）、米国南部メソジストミッション（ＡＳＭＭ）等が活動をおこなっており、すでに 18 の小さな集会が九州・横浜間にあった。

ヤングが日本に赴任した 1927 年にカナダミッションはソウルで開いた会議において、日本での在日朝鮮人に対する対する宣教会は教派的拠点をもつ活動でなく朝鮮人キリスト者を一つの教会「在日本朝鮮基督教会」に結集させることが合意された。ヤングはその在日朝鮮人伝道活動の全てにわたって監督する責任者に任命される。ヤングは本部を神戸の原田村（神戸市立王子動物園付近）において活動を開始した。

ヤングの活動は目覚ましいもので、九州では地方会もつくり、1931 年 4 月 20 日に開かれた第 3 回九州地方会ではヤングが会長に選任されている。そして 1934 年には大阪で全国的な組織「在日朝鮮基督教会」が作られヤングはその初代会長に選ばれている。

ヤングらの努力によって在日朝鮮人の教会は成長した。ヤングが日本に赴任した 1927 年と 1935 年を比較すると、教会数は 27 から 72 に、洗礼会員は 621 人から 1098 人となっている。このことについてヤング自身は「同期間に在日朝鮮人数がおよそ 4 倍に増加したことに比べれば驚くほどの数値ではない」としている。（"The Korea Mission Field"1936 年 4 月）

ヤングは、来日後の約 10 年間は順調な宣教活動をしていたといえる。しかしその後、日本の侵略政策が推し進められ国内での宣教活動への締め付けが厳しさを加えてくるにしたがってヤングの活動も不自由なものとなってくる。

例えば 1936 年 11 月には日本国内のプロテスタント教会の連合体である「日本基督教連盟」に加盟するにあたってこれまでの「在日本朝鮮基督教会」という名称が「在日本」をとった「朝鮮基督教」と改められた。日本国家からすれば植民地支配下の朝鮮はもちろん日本であり、ことさら「在日本」をつけることは、独立志向的なことであったのだろう。

このような圧力は当然朝鮮人キリスト者の間に争いを持ち込むものである。その間の事情を『特高月報』は次のように書いている。

「遂に昭和十一年日本基督教聯盟に加入し、稍々内地人との折衝部面を開きたり。然れども此を以て内鮮融和の態度を表示せるものとは認められず、依然として幹部牧師に在りては尚一歩進め、全的合同を遂げ宗教を通じ内鮮融和を遂行せんとする意見を強調せるも、主催宣教師エル・エル・ヤング及民族意識濃厚なる分子の反対により一蹴せられたる状況にありたり」

●朝鮮基督教会の合同問題

更に時局が切迫してくると、日本の宗教界は日本政府の方針によってキリスト教それぞれの教派の存在を容認しない方向に進んでゆく。プロテスタント教会については、徐々に統合させ最終的に一つの教団となるように圧力を加えていく。一定以上の教会数、信徒数をもたない教派には存続を許さないという圧力が加えられ、やむなく日本の教派との合同問題が浮上してくる。

1938 年 5 月の第３回朝鮮基督教大会で日本のキリスト教の中では大きな教派である日本基督教会と「合同もしくは協調」することが決定され、その交渉委員にヤング他５名が選ばれる。

この間の事情について先の『特高月報』では、以下のように述べている。宣教師や在日朝鮮人キリスト者の苦悩がにじみでているような内容なので、少し長いが引用する。

「支那事変勃発により国内に於ける挙国一致の国民的輿論の昂揚せる客観情勢に逢着し、従来の如く超国家乃至民族固ろうなる部面を内包せる形態は許容されざるを看取せる一部牧師等に在りては、日本基督教との合同により叙上国内情勢に順応せんと画策するに至り、一方日本基督教に於ても朝鮮基督教の存在を再検討するに至りたる結果『東亜の現状に於て内鮮融和は最も緊要にして現状の如く国内に日本基督教の他に朝鮮基督教があり。例えば基督教世界大会には日本代表の他に朝鮮代表の出席があり、曾て同大会に於ては彼等は旧韓国旗を掲げたる等の不都合もあり、対外的にも又彼等の民族意識を抑圧する意味よりするも此の際朝鮮基督教を抱摂し以て彼らを指導すべきなり』と謂ひ、偶々両者の意見に相通ずる所ありたる為、右合同運動は推展さるゝに至れり。…結局日本基督教会側は『全的に自己教会に包摂せんとする方針』なるに対し、朝鮮基督教側は主宰エル・エル・ヤングの主観に左右され、同人は『朝鮮基督教側は日本基督教と環境に於て又其の歴史に於て特殊事情あるを以て合同は無意味なるが、只現状の儘進む事は困難なるを以て緊密なる協調を図る』と言ふが如き相反せる主張…」

日本基督教会との合同問題は、翌 1939 年 4 月には、日本基督教会側より加入にあたっては、①日本基督教会の信条に服すること、②教役者の再試験をなすこと、③布教は国語（日本語）を使用することを通告してきた。同年 9 月 19 日、朝鮮基督教会側は名古屋で会合をし、①日本語での布教を削除、②教役者の再試験に対して現在の朝鮮基督教会の教役者を認めること、③現在の朝鮮基督教会を合同後は日本基督教会中会として認めることの「緩和要求案」を出したりしたが、結局朝鮮基督教は地域連合会単位で順次日本基督教会に合同させ

れれることになった。1940 年 1 月、朝鮮基督教臨時大会および同年 10 月の日本基督教会の大会でそれぞれ決議がなされ、同年３月に合同が終了することになる。この間、この合同に反対して辞任する朝鮮人牧師も現れるがその流れは止めることができなかったのである。

合同後の日本基督教会は、1941 年 6 月、すべてのプロテスタント教会を統合した「日本基督教団」の一部となり、更に 43 年 4 月には「部制」も廃止されるに至るのである。(1941 年 6 月の日本基督教団創立時の総務局長・鈴木浩二が私の母方の祖父で、創立後の報告に幹部３人の一人として伊勢神宮に参拝した記録が残っている。)

●神社参拝問題の波紋

日本政府がキリスト者に要求した「神社参拝」もまた宣教師や朝鮮人キリスト者に大きな影響を与えた。「外国人であるカナダ人宣教師は、参拝することを強要されませんでした」(R.K.アンダーソン、『愛知県下における「朝鮮基督教会」の歩み』199 頁）というが、朝鮮人キリスト者に対する神社参拝への圧力は日増しに強くなっていった。同じくカナダからの宣教師であったマカイは、神社参拝に賛成する日本基督教連盟から脱会を主張し、また、神社参拝した朝鮮人キリスト者に何らかの処分をすることを主張した。

一方、ヤングは、「この地の一人の兄弟が全てのことにおいて信仰深くなかったときには、われわれは残念に思うが、しかし、一点の失敗によってその者を見捨てたり、彼と付き合うことを拒否するのであれば、われわれは、主が示された二大戒律の内の一つを破るものとして、自らをさらすことになってしまうと、強く訴える」（前掲『愛知県下‥‥』207 頁）という立場をとる。ヤングが信仰的立場を考えつつも、在日朝鮮人キリスト者のおかれている厳しい状況についての同情がこのような発言をヤングにさせているのでなないかと思う。マカイは辞任して 1939 年 7 月 25 日カナダにもどり、ヤングは引き続き日本で活動することになる。

紆余曲折がありながらも 1939 年 11 月 25 日にカナダミッションは、神社参拝問題により日本基督教連盟からの脱退を決定している。

●ヤングの帰国

ヤングは引き続きカナダミションの援助を受けながら在日朝鮮人のための医療活動にも力を注ぎ、一部では実行に移されていた。しかしその後診療所の許可が取り消されたり、先の日本基督教団（1941 年 6 月成立）の関連で、諸宗派が 41 年 3 月までに外国(人)からの影響・資金援助を完全に排することを要求されたこと等により、ヤングらの活動ももはや不可能な状況に追い込まれていった。

1940 年 6 月の『特高月報』には、「旧朝基系牧師伝道師等も相互の親睦に名を藉り、エル・エル・ヤングの下に結集し、従来通りの月例祭等を施行せんとしおり…京、阪、神、和歌山市等に居住する之等の者はエル・エル・ヤング方に集合し、李相国牧師の司会にて祈祷会を執行せる等の

事例に徴するも、彼等は未だ旧朝基に対する執著を多分に内包しつゝある実情なり」という記述もみられる。

1940 年末までに日本にいた外国人宣教師のうち四分の三が日本を離れることになったが、ヤングもその中のひとりであった。同年 12 月 10 日日本を発ち、12 月 23 日カナダのバンクーバーについたのである。その一年後には太平洋戦争が始まるという時期であった。

●戦後ふたたび日本へ

1945 年 8 月 15 日、日本が戦争に破れ朝鮮が植民地支配から解放された。日本に暮らす朝鮮人への思いがつのっていたであろうヤングは、1949 年 2 月 11 日、再来日する。74 歳であった。

しかし翌 1950 年 2 月 21 日夜、日本で亡くなられた。同 23 日、在日本大韓基督教総会の総会葬が挙行された。

ヤングの最初の妻・Catherine Mair は、1919 年急死し、1922 年に同僚の宣教師であった Miriam Fox と再婚した。Fox も在日朝鮮人の宣教に大きな功績を残している。

神戸市立外国人墓地の墓標には、「強くかつしなやかな心、厳しくも仁慈な態度で福音を伝え、1950 年 2 月 21 日夜 75 歳で一生を終えた。在日韓国教会の創立者であり神学博士であった彼の地上の生活を記念すべくこの文をしたためる。1951 年 5 月 25 日 在日本大韓基督教会総会」とある。

再来日後のヤングは、老齢であり健康問題もあって思うような活動ができなかった。しかし、長年働いた日本の地でかつての仲間の在日朝鮮人キリスト者とともに暮らしたひとときは、彼にとって人生をしめくくるにふさわしい、幸せなひとときであったと思う。

【参考文献】

①日本基督教団中部教区愛知西地区靖国神社問題特設委員会編『愛知県下における「朝鮮基督教会」の歩み―戦時下を語る証言に聞く―』（1998.3、『むくげ通信』168 号、信長正義図書案内参照） ※本書資料編所収のヤング関係の資料を多く利用させていただいた。

②「在日大韓基督教会 宣教 90 年略史」（1998 年版同総会発行の手帳所収）

③韓国基督教歴史研究所『韓国キリスト教の受難と抵抗―韓国キリスト教史 1919～45―』（1995.2、新教出版社）

④八幡明彦編著『<未完>年表・日本と朝鮮のキリスト教 100 年』（1997.3、神戸学生青年センター出版部）

⑤呉允台『日韓キリスト教交流史』（1968.10、新教出版社）

再度公園の看板